

久下 陞 著

一 乘佛性權實論の研究

この本は中国唐代の法宝という人が書き残した書の紹介であり、今まで埋もれていた宝石に何とか日の目を見せようと努力した報告書である。

もう五十年もの昔になろうか。恵谷隆戒先生が塚本善隆先生、伊藤真徹先生、鶴飼光順先生等と共に、金沢文庫の宗典調査中に、はからずも発見されたのが法宝のこの書である。この事情については、この本の巻頭の牧田諦亮先生の序文に詳しく述べられている。

しかし、発見された写本は写真に収めたまま蔵されていた。歳月は流れた。佛教専門学校が大学となり、その学生であった私は、恵谷先生からこの写本の研究を命ぜられた。謎のような写本の文字の列を前にして、どこから手をつけてよいか途方にくれた。蔵の中の長い眠りの間に、文字は虫に食われ、落丁や乱丁もあり、まるで暗号文を解読する思い。

大学は伸展期に差し掛った。私も通信教育の業務に明け暮れていた。その間、恵谷先生、

牧田先生からお叱りを受けた。一日放置すれば十年の彼方に遠ざかる、それが学問だと。

苦難の旅を終えて帰国した玄奘の権威は絶大であった。その訳場は天下の俊英を集めた。法宝も招かれてこの大事業に加わった。唐の世を挙げて草木も靡く三蔵の傘下にあつて、彼だけはこの巨匠の学風を冷静な目で見ていた。そして遂に、法相宗一家が唱導する一分無性（一分衆生無仏性）の論に反逆した。悉有仏性の信念は一步も引けなかった。一代の権威の陣営に矢を放ったのである。かくて孤軍の士は袋叩きに遭った。その書の埋没は抹殺の仕打ちであらう。

人類が人間平等の地平を開くまでの曲折の深さは洋の東西を問わない。仏教も例外ではない。わが伝教大師最澄の生涯の労作の大半は、法相学との仏性論争に費やされた。ところがその膨大な著作の内容の微妙な疑が、いまだに究明されていない。それは彼が論拠の基盤とした法宝の書が失われてたためである。

「人権尊重」とは始めから人類のスローガンとして朗朗と響いていたのではない。血みどろの中で叫びつづけてきた生命の声だ。

戦争中、南太平洋の波浪の中で、私を悩ませたのは *Might is right*. というスローガンであった。それが真理か、そんなことがあつてよいのか。……そしてやっと、仏教の中で真実の命題、*Right is right*. に一生を捧げた人物に遇うことができた。それが沙門法宝であり、沙門最澄である。

京都大学人文科学研究所で、牧田先生のご指導を受けていたとき、きびしく戒められた言葉がある。

「世の学問の徒の中には、経論の一部を引用して、都合よく論を成すものがある。その流儀に倣ってはならない。」

この一言は絶えず私の耳の底で鳴っていた。法宝の一言一句を追いつづけさせたのはこの戒語である。

恵谷先生は遷化され、今となっては、やっと活字になったこのレポートを、この世で目に懸けるすべは、もうない。師の霊前にこれを捧げ、ただひたすら、伏しておわびをするばかりである。

（くげ のぼる 文学部助教）

昭和六十年十月 隆文館発行
本文七五〇頁 九、五〇〇円